



この冬は、関西で越冬しているリュウキュウサンショウクイを探すべく、機会を見つけては山に行き、エナガの群れの周辺をチェックしています。おのずとカラ類の混群をじっくり見ることになっています。そこで今回は、カラ類の混群に注目してみます。テーマは、カラ類の混群にはどんな鳥が加わっているかです。

●混群とは

混群というのは、複数種からなる群れのことですが、複数種がある場所に一緒にいるだけでなく、ある程度移動を共にしているものを指します。果実をいっぱいつけた木に何種かの鳥が来ていても、それだけでは混群とは言えませんが、一緒にやってきて、一緒に飛び去れば、それは混群です。

鳥において混群は珍しくはなく、シギドリ類やカモ類などでは、むしろ普通に見かけます。冬に見かけるホオジロ類の群れもしばしば混群ですし、ミヤマガラスの群れにコクマルガラスが交じっていれば混群です。でも、なぜか混群とってまず思うのはカラ類の混群。

●日本のカラ類混群の研究

日本各地で、古くからカラ類の研究が行われています。しかし、まとまった研究は、北海道(日野 2004)や東北や長野県(中村 1988)など、なぜかいずれも東日本で行われてきました。そのため混群研究の主役は、エナガやシジュウカラ、ついでヒガラやコガラです。ヤマガラは端役でしかなく、メジロはまるで登場しません。

しかし、関西人が知ってるカラ類の混群には、たいていヤマガラとメジロが混じっています。むしろメジロが中心のカラ類の混群もよく見かけます(メジロがカラ類かどうかはさておくとしましょう)。しかし、日本のメジロが主役の混群研究は、石毛ほか(2002)くらいしかないのが現状で、それは沖縄県での研究です。

●カラ類の混群の構成

カラ類の混群には、単に複数種が混じってるだけでなく、役割分担めいたものがあると考えられています。つまり、個体数が多く混群の中核をなし他種を引きつける中核種(または先行種)と、中核種についていく個体数少なめの随伴種(または追従種)です(日野 2004)。同じ種でも、混群の構成次第で、中核種になったり随伴種になったりすることがありますが、種によって中核種

になりやすさは、およそ決まっているようです。

東日本でのカラ類研究では、多くの場合中核種はエナガで、エナガが不在の場合、ヒガラなどが中核種になることがあり、そこに他のカラ類やキツツキ類が随伴種として混じります(日野2004)。

これに対して、西表島ではメジロが中核種となります(石毛ほか2002)。そこに随伴種としてヒヨドリ、リュウキュウサンショウクイ、シジュウカラ、キビタキが混じる。もはやカラ類の混群とは呼びにくい状態です。

沖縄県にはエナガがいませんから、メジロが中核種になるとして、じゃあエナガとメジロの両方がいる西日本では、誰が混群の中核種になっているのでしょうか? エナガとメジロの両雄は、どのように並び立っているのでしょうか?



図2: メジロ 2015.2 和泉市内(納家 仁)

●野外で実際に観察してみよう

カラ類の混群において、エナガとメジロは、それぞれどのような条件で中核種として振る舞うのか。メジロとエナガの両方が普通に生息する西日本は、カラ類の混群研究を一步進めるのに、とても面白い場所かもしれません。今度カラ類の混群に出会ったら、そんな目で観察してみてもどうでしょう。

そして、エナガを含む混群には、リュウキュウサンショウクイが加わっている可能性があります(和田 2016)。混群に出会ったら、リュウキュウサンショウクイ探しもお忘れなく。

●引用文献

- 石毛久美子・伊澤雅子・上田恵介(2002) 亜熱帯マングローブ林でのメジロを核にした混群形成. *Strix* 20: 153-158.
 中村登流(1988) 森と鳥と. 信濃毎日新聞, 長野.
 日野輝明(2004) 鳥たちの森. 東海大学出版会, 秦野.
 和田 岳(2016) リュウキュウサンショウクイの東征. *むくどり通信*(245): 9.



図1: エナガ 2014.1 和泉市内(納家 仁)